

早稲田大学 2024年度
一般選抜 教育学部



〈2024 R06180015 (国語 (C))〉

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。
5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

(一)

次の文章は、小林勝の小説「軍用露語教程」の一節である。アジア太平洋戦争下、陸軍予科士官学校に入学した一七歳の「潔」は、命令でロシア語を学習することになった。ロシア語の教官「峰」は規律に厳しい人物だったが、「潔」は他の生徒たちが苦勞したロシア語の発音を見事にこなすことができた。ある日、「峰」の自宅に招かれた「潔」は軍隊を離れた交流を期待するが、「峰」は終始堅苦しい姿勢を崩さないまま、「潔」の帰りがけにロシア語の分厚い本を手渡した。以下は、「潔」が初めてその本を開く場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

実際、彼は何気なく、厚い古びた表紙をめくったのだ。紙はすっかり茶色に変色していた。かびくさい匂いがうつすらと、たちのぼって来た。それは、パリパリいう新鮮な音と、強い印刷インクのおいのある露語教程とは、まるきり違っていた。潔は、自分が、古いじゅうたんのしきつめてある、暖かいが幾分暗い、どこか書齋とでもいった処へ連れこまれて行くような、不思議なときめきを感じた。それは、入校以来、決して味わったことのない雰囲気だった。彼は思わず、小さな身震いをした。

彼はもう一枚めくった。すると、多分それは、誰かの小説であるらしく、大きな題字が出て来た、彼は読んだ、
Крыжовник (注) クルイジョーフニク……

無論、彼はそんな単語を知らなかったので辞書をめくった。すると、戦車や重砲とは、絶対に何の関係もない言葉が出て来たのだ。彼はじつと目をこらした——「すぐり、という文字の上に。たちまち、小さな緑色の葉や、しなやかで細く長い枝や、それらの間の、緑色の、紫色の、小さなガラス玉のような実が、潔の眼の前をさえぎった。彼の舌は、その酸っぱい味に痙攣した……」

¹ 昼間の烈しい訓練の疲れで、赤く、はれぼったい眼が大きく見開かれた。彼の指はあわただしく、ひっきりなしに辞書をめくった。実際、軍用露語教程にはない単語ばかりが並んでいた。彼が理解できる言葉と云えば……
デアル……デアッタ……シカシ……などという類のものだけだった。が、彼は、人間が、高い、峻しい山を一步步々よじ登って行くように、進んで行ったのだ。一行をやつと終り、二行目にはいった。彼は読んだ……

ブイロ チーホ ネ ジャールコイ スクーチノ
…… Было тихо, не жарко и скучно ……

彼は自分流に直訳した。

——静かだった、暑くなかった、そして……彼は終いの単語を引いた。スクーチノ……副詞、退屈に、面白くなく。淋しく。

——静かだった、暑くなかった、そして、退屈だった……そして退屈だった……

あ、あ、あ、と彼は胸の中で小さな声をあげた。そして、退屈だった……こんな言葉の、そしてこんな表現の通用する世界は、この学校の中には全くなかったのだ。そして彼はブイロ・チーホ、ネ・ジャールコイ・スクーチノ、とまるで詩の一節でも暗誦するかのように繰り返していると、夏の、さえぎるものの何物もない平原が、まるで海のようにゆったりとその姿を彼の体の中にひろげて行き、ロシア語を習うと聞いた時から浮んで離れることのなかった二つの死体が、次第々々に薄れて、広い平原の彼方へ、ゆつくりと沈んで行くのを見たのである。この夜から、自習時間は、その名前の如くまさしく自習時間そのものになった。潔は夜の二時間の中で解き放たれる思いがした。峰の家を訪れた時の不快さは、嘘のように消えてしまった。潔は思った。

——やっぱり、峰教官は、ほかの教官たちとは違っていた、それにしても、こんな本を貸してくれるなんて、何ていい教官だろう。

武蔵野に秋が来た。風が日一日と冷たくなり、木々の葉が風の弦をうけてかきならす音は、日ましに、乾いた、単調な音に変って行った。そして、どんなに鋭く、強く風の弦が木々に触れても、もう音楽は聞えなくなった。木々は裸になっていた。そして、雪よりも一足先に、雪よりも白く、B 29 が青い空に浮ぶようになった。

年を越えて空襲は烈しさの度を加えて行つた。午前も午後も、正常な課業が中断されることが多くなつていった。潔が峰教官に会う回数も、だから、減つていった。そんな、或る日の朝だった。

ロシア語の授業が終つてから、寒い廊下の一隅で、潔は、峰教官を呼びとめた。潔は寒さにもかかわらず、白い頬に鮮かな血の色を浮べていた。眼は、そのために全身を投げ出しても悔いのない希望を持つ者の、熱っぽい、輝き出すような光をたたえていた。こんな眼は、もう、栄養の乏しい、睡眠不足と烈しい訓練にうちのめされてゐる生徒たちの誰にも発見できないものだった。峰はその眼を見て、うたれたようにたちすくんだ。

――教官殿、と潔は憑かれたように早口で言つた、私は、クルイジョーフニクを全部、暗誦いたしました。

そして潔は、微笑した。じつとみつめていた峰の顔に、はじめは疑わしいような、やがて、どうしても信ぜざるを得ないような表情が走り過ぎた。峰の眼は、一瞬、何もかも忘れ果てたように、輝いた。がしかし、次の瞬間、彼はぶるつと頭をふつた。峰の顔が硬くこわばつて来た。それから、突き放すようにとげとげしい眼になつた。ようやく、彼は、低い声で言つた。

――ちょっと、やつてみい。

潔は棒立ちになつたまま、すらすらと暗誦しはじめた。一字一句もつかえず、正確に発音しながら、彼はつづけた。

突然、峰は右手をつき出して、烈しく言つた。

――やめえ。もういい。

峰と潔は黙つてむかいあつて立つていた。潔の眼は酔つたようにうるんで、優しく峰の顔を見ていた。峰は、かすれた声で言つた。

――香取は、航空へ進むそうだな。

――そうであります、教官殿。と潔はおうむ返しに答えた。自分が何を言つたか、ろくに考えていないような返事だった。

――すると、もう一ト月で卒業だな。

――そうであります、教官殿。

峰の顔に毒々しい笑いがふきあげた。彼はすぐ、その笑いをおし殺して、ゆつくりと、言つたのだ。

――原書は返してもらおう。

――は？

――お前は航空へ行くんだ、もうロシア語どころではなからう。

潔は幾分青ざめた顔つきになつた。

――もうすぐ、香取には、天覧^(注2)に供する模範答案を作成してもらわねばならん。もう、それくらい出来たら、原書も必要なからう。それから、……峰は、潔の眼を深々とのぞきこむようにしながら言つた、……香取は必要以上に原書を読みすぎたようだ。おれもな、学生時代は片っ端から読みあさつた、片っ端からだ、然し、今はな、こうして皆を立派な将校生徒に（この時、また冷たい笑いが浮んだ）しようと思つて教官をやっている。模範答案を作りあげたら、もうロシア語は忘れろ。

――いいえ、忘れません、教官殿。

潔は、小さな声で、弱々しく、そして、のろのろと言つた。彼の眼から次第に、光が消えて行きつつあつた。

潔は、もつと小さい声で言つた。

――忘れません、教官殿。

――そんなものをいくら暗誦したつて、もう無駄だ……無駄だ、と峰は我を忘れたように大きな声で言つた、彼は自分が教官で、潔が生徒であることなど忘れてしまつたかのようなうだつた。

――生徒隊長殿もいつも航空生徒には訓辞されているではないか、お前たちは、名誉ある特攻要員になるのだ

と。

潔の眼は輝きを失って、鈍くなった。³彼は、喋りつづける、瘦せた、猫背の一人の男の顔をじつと見ていた。それから、低い声で言った。

——わかりました、教官殿。

潔は、自分の眼から、輝きが全く失われてしまったことには、無論、気がつかなかった。ただ彼は、ここ半年の間、毎晩、輝いていた二時間があって、そしてそれというのも、古びた一冊の原書が机の上に開かれるからだということ、そして、実は、その古びた外見にもかかわらず、その本の世界へはいって行くと、その世界には、真に輝いた日の光があるということ、そして今は、永遠にその光が消えうせたということ、その光を奪い去って行ったのは、今眼の前に立っている、この貧弱な瘦せた男だ、ということをぼんやりと感じていたのだ。そして、遂に、彼には、この灰色の皮膚を持った男が一体どういう男なのかを理解できず、また理解する必要もなくなっただことを感じたのだ。

潔は、敬礼した。彼は峰に背をむけた。人けのなくなった、冷えきった長い廊下を、一度もふりかえらずに、歩いて行った。

(注1) クルイジョーフニク：ロシアの小説家チェーホフの短篇「すぐり」のこと。

(注2) 天覧：天皇が観賞・観覧すること。

問一 傍線部1「昼間の烈しい訓練の疲れで、赤く、はれぼったい眼が大きく見開かれた」とあるが、ここには「潔」のどんな様子が表現されているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 軍の学校に入学する以前、故郷で親しんでいた自然豊かな情景が外国にもあると知り、急にロシア語の世界を身近に感じ始めている様子。

ロ 新しい言葉との出会いが、自分にとって新たな世界の入口になるかも知れないという期待から、興奮で胸を高鳴らせている様子。

ハ 軍隊用の教科書では見たことのないロシア語の単語と出会い、早くそれらの意味を知りたいと好奇心に突き動かされている様子。

ニ 戦争とはまるで関わりのない文化的な雰囲気にとまどいながらも、描かれた自然の美しさに心の安らぎを感じている様子。

ホ たった一つの単語から鮮やかな情景を想像させてくれる文学の力に驚き、厳しい訓練の疲れが吹き飛んでしまった様子。

問二 傍線部2「突然、峰は右手をつき出して、烈しく言った」とあるが、このときの「峰」の思いの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 苛酷な軍隊生活の中でもロシア語の原書に熱心に取り組んだ「潔」の生き生きした様子を羨ましく感じながらも、そんな「潔」の才能を伸ばすことを許さない戦争の不条理に対して、強い憤りを覚えている。
ロ 軽い気持ちで手渡した難解な原書を見事に暗誦してみせた「潔」のロシア語の資質に舌を巻きうろたえながらも、教官と生徒という立場を考え、「潔」に自分の動揺を気取られてはならないと取り繕っている。
ハ 自分自身が教えることに自信を持てずにいるロシア語に真剣に向き合っている「潔」の姿勢に心を打たれながらも、「潔」が向かう戦場ではロシア語は役に立たないだろうという諦めと無力感にとらわれている。

二 思いもよらない「潔」のロシア語に対する情熱に驚き、かつての自分に通じるものを感じながらも、卒業後の「潔」を待ち受ける残酷な現実を想像し、彼に対する期待や賞讃を懸命に振り払おうとしている。

ホ 短期間でチェーホフの短篇を読みこなせるようになった「潔」の成長ぶりを頼もしく感じながらも、軍務とは関係ない文学の世界に「潔」を没入させてしまったことに対して、後ろめたい思いを感じている。

問三 傍線部3「彼は、喋りつづける、瘦せた、猫背の一人の男の顔をじつと見ていた」とあるが、ここには「潔」のどんな思いが表現されていると考えられるか。記述解答欄に記せ。

問四 問題文から読み取ることができる「潔」と「峰」の関係について一八〇字以内でまとめ、記述解答欄に記せ（句読点等も一字に数える）。

(二)

次の【A】は『宇治拾遺物語』所収の説話であり、【B】は『撰集抄』に収められた同内容の説話の後半部分である(時代と登場人物に違いがある)。これらを読んで、あとの問いに答えよ。

【A】今は昔、治部卿通俊卿、後拾遺を撰ばれける時、秦兼久行き向かひて、「おのづから歌などや入る」と思ひてうかがひけるに、治部卿出でるて物語して、「いかなる歌か詠みたる」といはれければ、「はかばかしき候はず。後三条院かくれさせ給ひて後、円宗寺に参りて候ひしに、花の匂ひは昔にも変はらず侍りしかば、つかうまつりて候ひしなり」とて、

「去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とこそつかうまつりて候ひしか」といひければ、通俊の卿、「よろしく詠みたり。ただし、けれ、けり、けるなどいふ事は、いとしもなきことばなり。それはさることにて、花こそといふ文字こそ女の童などの名にしつべけれ」とて、いともほめられざりければ、言葉少なに立ちて、侍どもありける所に、「この殿は大方歌の有様知り給はぬにこそ。かかる人の撰集承りておはするはあさましき事かな。四条大納言歌に、

¹ 春来てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ

と詠み給へるは、めでたき歌とて世の人口にのりて申すめるは。その歌に、『人も訪ひける』とあり、また、『宿のあるじなりけれ』とあめるは。『花こそ』といひたるは、それには同じさまなるに、いかなれば四条大納言のはめでたく、兼久がはわろかるべきぞ。かかる人の撰集承りて撰び給ふ、あさましき事なり」といひて出でにけり。

侍、通俊のもとへ行きて、「兼久こそかうかう申して出でぬれ」と語りければ、治部卿うち頷きて、「さりけり、さりけり、物ないひそ」といはれけり。

(『宇治拾遺物語』)

(注) 治部卿通俊卿：藤原通俊(一〇四七—一〇九九)。『後拾遺和歌集』の撰者。

去年見しに：『金葉集』に左近将兼方の作として入集している歌。

四条大納言：藤原公任(九六六—一〇四一)。博学多才で詩歌にも優れた。

【B】(※【A】の秦兼久が兼方に、通俊が藤原俊成、四条大納言が俊成の父俊忠に、それぞれ対応している。)……兼方、「かくと申させ給へ」とて、「花こそやどのあるじなりけれ」とばかり云ひて、出にけり。俊成きき給ひて、「をちあはれぬ」とぞのたまはせ侍りける。

花こそといふ句を、「かたぶき給ふ」と聞きて、「俊成の父、俊忠の歌の花こそはいかに」と、とがめけるなり。但し、中納言の難じ給へるは、『去年見しに色もかはらず咲きにけり』といふまでは、いかなる風情の句もつきぬべげに侍るに、『花こそ物は思はざりけれ』といふ、むげによはき句なり」と、そしり給へるにこそ。ただ花こそといふ、こそをにくみ給ふにはあらしものを。しかる上は、なにしか俊忠の歌にはひとしむべき。

(『撰集抄』)

(注) つきぬべげに：「べげ」は、「べし」の語幹「べ」に接尾辞「げ」のつづいたもの。

問五 次の文章の空欄に当てはまる言葉として最も適切なものを、あとのa～cの選択肢から選び、それぞれ解答欄にマークせよ。

【A】の『宇治拾遺物語』は十三世紀成立の説話集で多彩な話を収めるが、先行する【a】や『古本説話集』、『古事談』などと酷似する話も多く収められている。【B】の『撰集抄』も十三世紀成立とみられる作者不詳の仏教説話集だが、作者が歌集『山家集』で知られる【b】に仮託されており、そのためか、【B】ではエピソードの時期が実際よりも後の時代に変更されている。藤原俊成は実際には【c】の撰者であることから、【A】【B】では【A】の方が実際の時期に合致すると判断できる。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|-------|---|--------|---|--------|
| a | イ | 今昔物語集 | □ | 三宝絵 | ハ | 沙石集 | ニ | 醒睡笑 | ホ | 大和物語 |
| b | イ | 阿仏尼 | □ | 鴨長明 | ハ | 兼好法師 | ニ | 西行 | ホ | 藤原定家 |
| c | イ | 拾遺和歌集 | □ | 詞花和歌集 | ハ | 千載和歌集 | ニ | 新古今和歌集 | ホ | 新勅撰和歌集 |

問六 傍線部1の和歌は、何をどのようにたとえているのか。記述解答欄に記せ。

問七 自分の歌に対する通俊（俊成）の評価に対する兼久（兼方）の主張（反論）に対して、【A】【B】ではこの評価がなされている。【B】の語り手は、どのような理由から、どのような評価を下しているか。空欄【X】にあてはまる言葉を記述解答用紙に100字以内で記せ。

X

兼方が俊成の批判に対して、過去の名歌で『花こそ』が使われていることを根拠に反論したことについて、

(三)

中国唐代の小説「人虎伝」は、中島敦の小説「山月記」の典拠として知られる。次に示すそれぞれの【冒頭】と【末尾】の部分とを読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。

【冒頭】

〔人虎伝〕隴^{ろう}西^し李^り徴^{てい}、皇族^{こうしゆく}子^こ、家^け於^お號^{ごう}略^{りやく}。徴^{てい}少^{わか}博^{はく}学^{しゆ}、善^く属^{しよく}文^{ぶん}。
A 從^つ二州府貢^{きん}焉^ん。時^{とき}号^{ごう}二名士^{めいし}。天^{てん}宝^{ほう}十五載^{じふご}春^{しゆん}、(略)
登^{のぼ}二進^{しん}士^し第^{だい}。後^{のち}数^{かず}年^{ねん}、調^{てう}補^ほ二江南尉^{かんなんゑい}。徴^{てい}性^{しやう}疎^そ逸^{いつ}、恃^{たの}才^{さい}倨^{きよ}傲^{がう}。不^な能^り屈^{くつ}跡^{せき}卑^ひ僚^{りょう}。

〔山月記〕隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

李徴は職を辞するが、生活の資を得るために呉楚の地に赴いた。一年余して、その帰路に汝墳の宿屋で発狂して行方不明となった。

翌年、嶺南に使いする觀察御史の袁傜が朝まだきに商於の界を出発したとき、虎に襲われる。その叢中に身を隠した虎の声こそ旧友の李徴のものに他ならなかった。二人はしばし語らいの時を過ごす。(要約は「人虎伝」に基づく。)

【末尾】

〔人虎伝〕①虎又曰、「使^{つかひ}回^{かへ}日^ひ、幸^{ねが}取^と二道^{だう}他^た郡^{ぐん}、無^な三再^{さい}遊^{ゆう}二此^こ途^と。吾^{われ}今日^{けふ}尚^{なほ}悟^{さと}、一^{ひと}日^ひ都^{すべ}醉^め、則^{すなは}君^{きみ}過^か此^こ、吾^{われ}既^{すで}不^な省^{せい}。(略)此^こ吾^{われ}之^の切^き祝^{しゆ}也。君^{きみ}前^{すま}去^さ百^{ひやく}余^よ步^ぽ、上^{のぼ}二小^{せう}山^{さん}下^か視^し、尽^つ見^み此^こ將^{まさ}令^{めい}二君^{きみ}見^み我^{われ}焉^ん。非^ず欲^{ほつ}矜^{けい}勇^{ゆう}、令^{めい}三君^{きみ}見^み而^て不^な復^ふ再^{さい}過^か此^こ。」(略)叙^{じよ}別^{べつ}甚^た久^{きう}。傜^ら乃^{すなは}再^{さい}拜^{はい}上^{のぼ}馬^ば、回^{かへ}二視^し草^{そう}茅^{ぼう}中^{ちゆう}、悲^{かな}泣^{なみだ}所^{ところ}不^な忍^{にん}聞^{きこ}。傜^ら亦^{また}大^{おほ}慟^{なみだ}、行^{ゆく}数^{かず}里^り、登^{のぼ}嶺^{りやう}看^み之^を、則^{すなは}虎^こ自^{より}林中^{りんちゆう}躍^{はね}出^で咆^う哮^{こう}、巖^{いわ}谷^{こく}皆^{みな}震^{ふる}。②後^{のち}回^{かへ}自^{より}南^{なん}中^{ちゆう}。乃^{すなは}取^と他^た道^{だう}、不^な復^ふ由^{よし}此^こ。遣^{つかは}使^し持^も二書^{しよ}及^{およ}賻^ふ贈^{くわい}之^を、礼^{れい}、訃^ふ二於^に徴^{てい}子^こ。月^{つき}余^よ徴^{てい}子^こ自^{より}號^{ごう}略^{りやく}入^い京^{きやう}、詣^{いた}傜^ら求^{もと}二先^{せん}人^{にん}之^の柩^こ。傜^ら不^な得^え已^い、具^ぐ疏^そ其^{その}伝^{でん}、遂^{すなは}以^{もつ}二己^こ俸^{ほう}均^{ひと}給^く。徴^{てい}妻^{さい}子^こ免^{めん}飢^う凍^{どう}焉^ん。傜^ら後^{のち}官^{くわん}至^{いた}二兵^{へい}部^ぶ侍^し郎^{らう}。

〔山月記〕そうして、附加えて言うことに、袁傜が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい、其の時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、

あの丘に上ったら、此方を振りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為である。

袁惨は叢に向って、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の聲が洩れた。袁惨も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返って、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思つと、又、元の叢に躍り入って、再び其の姿を見なかった。

〔国訳漢文大成〕「人虎伝」、〔中島敦全集〕「山月記」による。

注 隴西：地名。 李徴：人名。 號略：地名。

従州府貢：州の推薦を受けて科挙を受験すること。

天宝十五載：七五六年。天宝は唐の玄宗皇帝の年号。載は年の意。

江南尉：官職名。 倨傲：おごり高ぶること。

虎榜：及第者名を記した掲示板。俊才を虎に例えた。

狷介：人と融和しないこと。 呉楚：地方名。

汝墳：地名。 嶺南：地名。 觀察御史：官職名。

袁惨：人名。 商於：地名。 南中：嶺南に同じ。

賻贈：死者を弔うための贈り物。 兵部侍郎：官職名。

問八 空欄

A には、国語辞典に「男子二十歳の称、元服して成年に達すること」と説明される漢字二字の語が入る。その語の下に漢字を含む熟語を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。なお、その下の漢字は、カタカナで表記している。

イ カン牛充棟 □ 十カン十二支 ハ カン髪を容れず

ニ 忙中カン有り ホ カン婚葬祭

問九 傍線部1「不能屈跡卑僚」の書き下し文として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ よくひれうにあとをくつせず
□ よくくつせずひれうをあとにす
ハ あとをひれうにくつするあたはず
ニ あとをくつしてひれうたるあたはず
ホ ひれうよりもあとにくつするあたはず

問十 傍線部2「悲泣所不忍聞」の返り点として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 悲泣所_レ不_レ忍聞
ロ 悲泣所_二不_レ忍聞_一
ハ 悲泣所_レ不_二忍聞_一
ニ 悲泣所_レ不_レ忍聞
ホ 悲泣所_二不_レ忍聞_一

問十一 「人虎伝」の末尾に記された内容に合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すでに人事不省になりつつある李徴は、帰路にはこの道を通ることがないように願う一方、出会いの記念に叢中から躍り出て咆哮する勇姿をみたいと伝えた。
ロ 人間の自覚が失われるのを危惧して、帰路は他郡を通るよう忠告する虎に哀慟する袁徴ではあったが、結局は弔いの手紙や霊柩を家族に送り届けなかった。
ハ 袁徴は、虎の言うように帰路を他郡にとつて無事に帰任し、自らの俸給を等しく分け与えたので、李徴の妻子は生活に困窮することが無かった。
ニ 虎との辛い別れをした袁徴は帰任後、李徴の妻子に手紙と弔いの品を使者に届けさせるとともに、李徴の息子が上京するのを待ちうけて霊柩を引き渡した。
ホ 虎に言われた通りに道を他郡にとつて無事に帰任を果たした袁徴は、その重要な任務の功績によって、すぐさま兵部侍郎に昇任してその名を知られた。

問十二 「山月記」の作者は、小説化に当たって、「人虎伝」の末尾の②の部分を用いていない。なぜ用いなかったのか。あなたの考えを記述解答欄に記せ。

〔以下 余白〕

国語 (C)
(記述解答用紙)

注 意

1. 受験番号（算用数字）・氏名は指示に従ってただちに所定欄に記入し、それ以外に記入してはならない。
2. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
3. 解答はHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで書くこと。
4. 試験終了時にはこの解答用紙を裏返して机の上に置き、指示を待つこと。

〈2024 R 06180015 (国語(C))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

(三)
問十二

問七

(二)
問六

問四

(一)

問

三

解答欄

採
点
欄

〈2024 R 06180015 (國語(C))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。



採
点
欄